



主張

教職員の育成

高橋清之

今年度、本校の第三回校内研究会は、道徳の授業研究で、私が授業者を引き受けました。前年度には振り返りに主眼を置いた学校公開研究会を開催し、本校教員は研究授業の機会に恵まれていたのも理由の一つでしたが……。若き日には「どうすればあの国語教師のように、生徒の目を輝かせ、読解力を高める授業ができるのだろうか」と教室の片隅で、発問から目線に至るまで汲み取ろうと学び、育ててもらいました。そのような教室の場面にこそ教員研修の源流があるのではないか、そこに流れる不易の精神は、今風に言うところのOJTにも必要であろうし、生かすことができるのではないかとこの期待も抱きながら、授業に臨みました。授業は「考え、議論する道徳」のヒントになればと、三年生とモラルジレンマ資料を用いて行いましたが、インターネット動画を補助資料に活用する工夫も試みたところ、予想を遥かに超える生徒たちの活発な議論が続き、瞬く間に五〇分は経っていききました。その後、何人かの教員が校長室を訪ねて来てくれ、授業について熱く語り合うこともできました。未来社会を生きる児童生徒に必要な資質・能力を育むことは、若手ベテランを問わず、校長も含めた全ての教職員にとっての「本懐」であることに異論はなからうと思います。まさに、そのために「絶えず研究と修養に励み……」なのだ、改めて強く感じています。



話は変わりますが、これからの時代を見据えた教育公務員特例法の一部改正及び文部科学省の指標の策定に関する指針等を受け、本県でも新たに「校長及び教員の資質の向上に関する指標」の策定に取り組むこととなり、私も設置された協議会の一員として加わりました。

岩手県には既に「ライフステージにに応じて求められるもの」という枠組と研修体系はありましたが、社会の急速な変化や今日的な課題等にも対応できる資質・能力を育む教育の視点で、全面的に見直す形となりました。指標は、年代別ライフステージを段階的に横軸に据え、縦軸には授業改善や学級経営等の資質向上に関する内容を項目別に配したものです。

その検討の過程において、指標の意義や重要性とは別に、改めて教員として必要な資質・能力に関する内容項目の多さを痛感させられました。教職の専門性はもちろんですが、素地となる人間性や社会性、教育的愛情や使命感、課題対応力等どれも不可欠のものであります。「指標は一人一人にとって分かり易く、意識できるものとなるよう、よりシンプルに」とは協議会メンバーの一致した意見だったのですが、いざ削るとなると、困難を極めました。見方を変えれば、これからの教育を担う教員に必要な資質等を真に育成していくには、今クローズアップされている「学校における働き方改革」やそのための環境整備等も並行して強力に進められなければ、実効性の乏しいものになりかねないということではないでしょうか。そして、それは子供たちに必要な資質・能力を育む教育を実現するための重要なポイントとも言えそうです。加えて、研修の在り方についても、OJTの有効性を認めつつも、現行のままで、果たして機能的な研修体制が組織できるのかも含めた省察や議論を行いながら、定数改善等もさらに推し進めていく必要があると考えます。

(全日中副会長・盛岡市立下橋中学校長)